
らき★すた【迷い込んだ黒犬・出張版】

さるめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき★すた【迷い込んだ黒犬・出張版】

【Nコード】

N4284I

【作者名】

さるめ

【あらすじ】

人としての要素がかけた人間の話でその一部。

その人間は退屈を体現した白い猫に拾われて……………。

その二人に芽生えたのはどこか屈折した昏くて、純粋な絆だった。

「だから、なんだろうな……………」

——お前を拾ったのは……。

(前書き)

注意書き

本編は Arcadia というサイトで投稿しているらき☆すたのオリ主二次創作ものの出張版です。

お試しという意味で新規に一話だけ投稿しました。なにとぞ、よろしくお願いします。

ちなみに主人公はヤンデレです。ので、恋愛感情は芽生えませんが妙な縁や絆を垣間見ることになると思います。

そんなキツイ残酷描写はないと思いますが…そう言うのが嫌な方は見ない方がいいでしょう。

そしてらき☆すたのキャラはメイン（こなた、かがみ、つかさ、みゆき）が出てきません。

その黒犬には人としての何かが幾つか欠けていた。

記憶がない。

性別がない……あるいは二つ持っている。（心は男で身体は女……
可変式の遺伝子を持っている）

痛みがない。

さまざまな社会的な肩書きもない。

これまでの自分の興味もこれからの自分の興味も無い……いや、最後に關しては薄いと言った方がいいだろう。

唯、明確に在るとすれば、唯そこに在る命だけだった。

その黒犬の名……唯一自分を示す免許証に書かれていたものは『かど門
かわ河かすが』という単語だった。

そんな彼を拾ったのは桜庭ひかるという白い猫だった。

この話は犬を拾った当初の猫との会話

「で、これは何だ？」

ひかるはややムツとしながら、彼？が作った料理を見た。

野菜がふんだんと使われたマーボー豆腐とポテトサラダが食卓に並べられたのを見て、やや怒りを込めた目でかすがを見つめた。

「マーボー豆腐にポテトサラダ……ふゆきさんに作り方を教わった料理だけど？」

ひかるはこの犬に家庭科という芸をふゆきに教え込むように頼んだ。この拾った黒い犬に自分がやらない家事をやらせたかったのだ。

料理なんて面倒、洗濯も面倒、裁縫も無縁……ある意味自堕落な生活をしている彼女はそれを全部やってくれる男を手にしてややご機嫌だったのだ。

しかし、他はともかく料理に関しては嫌いなものをピンポイントで付いて彼女を閉口させた、

彼女は野菜が嫌いだ。

ふゆきはもう少し分かりづらくしてくれるというのに、彼は野菜をメインに料理を作りまくっていた。

「別に食べたくないなら食べなくていいですよ？俺一人で平らげるのも造作はないですから」

いつの時代も家事が出来るものは立場が強い、なんとなくさらっと言った言葉を聞いてひかるはぐっと睨んだ。

「お前嫌な奴だな……」

「……あなたの都合で性格は変えれませんよ……そもそも、作ったものを食わずにそんな事言うあなたも十分な奴です……」

関心なさげにかすがは言い返すと、ひかるはムツとした。

そもそも拾ったのだから、飼い主の言う事を聞けという本質的にわがままな部分が心の中で擡げる。

「だったら、自分で作ればいいか、ふゆきさんにしてもらえばいいでしょう？俺より優しいですよ？」

「っっ……！もう、私は寝るっ……！片づけとけっ……！」

何故か判らないけど、ひかるは腹がたってどかどかとソファアの元

へと歩いて行く。
かすがは別にそれに怒るでも反論するでもなくボーっと見つめていた。

「頂きます……」

作った二人分の食事を1人分だけ食べてかすがは食器を片し、サラシラップを巻く。
不貞寝しているひかるを見つめて別にどうする風でもなく、夕飯を冷蔵庫へと入れた。

一方、ひかるは何故自分がこんな程度でイラついてるんだろうと内心、後悔していた。

そして、野菜が多いだけで何でこんなにキレまくってるんだろうという自分に内心呆れていた。

私は論理的で冷静な人物だったはずだ。

少なくとも同僚の教師たちと揉めたことはないし、上手く付き合っていたはずだ。

付き合っていた……のか？

——天原先生、今日の予定なんですけど……って桜庭先生……あー、また今度にします

ふと、男子教員が言った言葉が脳裏に響いた。

ああ、そうか……私は毎日会う同僚に喧嘩すら……嫌いという言葉すら吐かなかったんだな。

よくよく考えればその日から自分は誰とも関わらなかった気がする。

別に周りに気に入られようとは思わないが、何が好きで嫌いか趣味はどうとか話した記憶が職場では全くない。

あいつらは関わろうとしないし、私もそうだった。寂しいとは思わないが、どこか物足りない気がした。

かといって私から自分を曲げる道理はない。それでいいとつい最近、いや今の今まで思っていた。

学生時代の特有の思春期でふゆきと喧嘩したこともなくなったな、とひかるはそう思いかえしていた。

久々にいらだち紛れに叫んだのは、この犬の影響だろう。

「食べないんですか？」

かすがは何となく場を取り付くるように、————と言っても別に彼女の心情に対する不安など一切考慮していない——何とはなしに訊いた。

「何度も言わせるな、野菜は嫌いなんだ」

「ふうん……なら、俺は？」

「別に好きでも嫌いでもない……」

かすがはのほほんと尋ねるが、ひかるは落ち着いたのかそんな発言を返した。

まあ、かすがの質問も大概ズレているがそれに応える自分もズレているのだろう。

「だから、なんだろうな……」

「何がだ？」

かすがはひかるのその言葉に納得したように、ひかるの座っているソファーに座った。いきなり近寄られて僅かに驚いたがかすがはあまり気にしない。

「あんた、嫌いなものとどうでもいいものが……自分の中心になっていないか？」

「……………っ……………!」

何気に訪ねたかすがの一言が彼女自身の心を深くえぐった。

「まあ、趣味はどうか知らんけどさ」

「周りに刺激がないだけだ、ここ数年つまらないことや奴らばかりだ」

反射的にひかるはかすがに向かいそうこたえた。だから、この犬は飼い主の言葉に反射的に返した。

「だったら、あんたもつまらないんだろうな……そんな顔してるよ？」

「つつっ!……!」

その言葉に腹が立ってひかるは、ソファーにあった座布団でかすが

をどついた。

ばふっと当然のように彼の顔に吸い込まれかすがはのけぞった。

「うるさいっ、私はっ……」

何か言おうとしたが明確な言葉を吐きだせなかった。

自分がつまらない人間……だが、親友である女性は自分より恐らく刺激的な毎日を送っているのだろう。

ひよっとすれば自分以外の誰かはちゃんと生きてるんじゃないか？

誰もかれもが眩しく見えた、私の性格や価値観ではどう足掻いても…

いや、足掻こうと思っても萎えてしまうから。

「好きなもの……」

「……え？……」

「アンタの好きな食べ物は大体何だ？肉が好きなのか？野菜以外ってのは無しだ」

「お前……いきなり何を？」

「俺は嫌いな食べ物とどうでもいい食べ物しか、知らないんだが、そもそもあんた何が好きなんだ？」

「あ……」

思えばひかるは彼に自分の事を話したことはない、ただ拾って家庭科をふゆきに仕込ませていただけだ。嫌いな食べ物は分かったが自分分は好きな物を自分から話したことはなかった。

いや、思えば誰とも必要以上に関わろうとしなかったのだから、彼

女が何を好きかなどふゆき以外知らないだろう。

「う……む……わ、私……は」

好きなものがあるのだが、それを言うの名は自分でも微妙な気がした。かすがはどこか期待するような眼でひかるを見つめた。

「か、カロリーメイトの蜂蜜味に今、ハマってるんだ……」

「………何か、召使的にスゲェ助かる食べ物でありがとう」

「う、うるさいぞっ!! (〇〇〇〇)」

ひかるは自分の器用貧乏な味覚をこの時呪いたくなった。

そもそも自分は嫌いな食べ物はある癖に、食べ物に対してあまりこだわりがなかった気がする。

それを訊いたかすがはすつと立ち上がった。

「どうした？」

「じゃ、これからコンビニ行ってくる……カロリーメイトの蜂蜜でいい？」

「ああ、行ってこい」

その言葉にひかるはふつと笑ってかすがに手を挙げた。そして彼は玄関で靴をはき出ていった。

「私は何もしようとしないう癖に、あいつに分かってもらおうと思ってたのかもな……」

やや自嘲気味でいて優しい笑みをひかるは浮かべて、犬の帰りを待つことにした。

[illegible]

近くのコンビニをうろつけば見つかると思っていた。
得てして手に入れようと思えば思うほど手に入れにくいもの。それが世の常なのだろう。

あのカロリーメイトは新商品だったのか、3店舗くらい廻ったが見
つからなかった。日も落ちてきた頃に出かけたのであたりはすっか
り夜だった。

「初めてのお使いは失敗だったか？」

気のない返事かつどうでもいいようにそう言いかすがは歩きまわっていたが、ふと路地裏からヤジにも似た声が聞こえてきた。

「おいっ、その女の口押えろっ!!」

「なかなか、いい女ですねえ：やり甲斐ありますわぁ!!」

除いてみると、1人の美人の女が二人の男に抑え込まれてもがいている。

かすがはそれを見て別にどうする風でもなかったが、女は買い物途中だったのか、ビニール袋を散乱させて中身をぶちまけていた。

そこに目当ての蜂蜜味の品を見かけて目を引かれて立ち止まった。

「あー、すみません……」

「つつ!! テメェっ、ナニもんだぁ!？」

レイプをしようとしたチンピラらしき二人組は場違いともいえるほど、おっとりとした声をかけられて慌てて振り返る。そこには中世的な顔立ちの細身の少年（体は女）がいた。

「あなた達が押し倒してる女の人に用があるんですけど―――いいっすか？」

道を聞く様な感覚でかすがはその二人に訪ねた。

しかし、犯行現場を見られてた彼らからすればかすがのいい分などどうでもよく、女から離れて彼に襲いかかった。

「あ……ああ……」

女は目の前の光景が信じられなかった。

自分は会社帰り、見知らぬチンピラに裏路地に連れ込まれ犯されようとしていた。

そして自分と全く関わりのない人物が、自分に用があると云い声をかけ自分を押し倒していた男二人が彼に襲いかかった……。

だが、目の前の彼は強かった。

その結果……自分を滅茶苦茶にしようとした下劣な人種たちは地に倒れ伏せている……

普通なら、それに関しては同情も慈悲も被害者になりかけた自分が持たなくてもいいはずだ。

少なくとも、自分を助けた彼が男たちの爪を剥ぎとり、指を一本一本砕きおり歯も蹴り砕くというリアルな拷問劇を見なければの話だ。

怨嗟と断末魔と絶叫が被害者になりかけた美しい女性の耳にこびりつき、彼女はその様相をふるえながら泣きじゃくりながら見つめるしかなかった。

既に腰が抜けて動けない。自分に襲いかかったチンピラ達はぴくぴくと痙攣するだけの肉になり下がっているようだ。

こんなものを聞かされて見せられるくらいなら、この男たちに心身ともに凌辱されて捨ておかれた方がマシだったのではないか？と思
い掛けて否定しようとするが、

目の前の自分を結果的に助けてくれた彼の頬に返り血を浴び、のほ
ほんとした表情を見るとそれも吹き飛んでしまう。

「あー、血がついちゃったね」

ごしごしと手の甲で頬についた返り血を拭う。

どこか世間話をするようにかすがは軽い感じで女性に訪ねた。

人ふたり半殺しにしてもかすがには良心を感じないし、痛まない。

「付いてますか？血い？」

女は顔を青くし、ぶるぶると首を横に振った。

その冷酷なまでの無関心さに女性は助けられたことを後悔した。

目の前の男たちのように意識を失えばどれだけ楽だろう。

「あー、今日の事はショックだけど、忘れた方がいいですよ？」

女はぶんぶんとオーバーなくらい首を縦に振った。

その様子にかすがは満足そうにうなずいた。そして女性の横に転が
っている探し物を見つけて拾う。

「これ、欲しかったんで貰って行きますね？」

カロリーメイトを手に取り、苦笑交じりにかすがは女性に微笑む。
その瞬間、女は理解した。

自分はそのおまけで助かったのだ、と。

その優しい微笑の中には私も倒した男たちも映っていないのだ……と。

それを理解した瞬間、女性は一瞬壊れたように笑った。

かすがはそれを怪訝な顔で見つめるだけだった。

「ま、この調子なら警察に追われるなんてことはないから別にいいか」

チンピラらしき風貌の男たちと壊れた女性を関心なさげに見つめて、目的のものを手に入れたかすがは興味を無くした犬のようにその場を去っていった。

犬が興味を持つ者は自分の飼い主とその周りだけなのだから……。

☆★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「遅い」

かえってきたかすがにひかるは邂逅一番、不機嫌そうにそう言った。

「あー、悪い。新商品だから減りが激しいんだよ？いろいろ探し回ってさ……」

靴を脱いで居間に上がるとかすがはテーブルの上に置いてある、皿二つを見て微笑んだ。

その皿はポテトサラダとマーボー豆腐を持っていたものだった。

「余りに遅いから、嫌いなものでも我慢できずに食べてしまっただろ？使えないな」

「それはすいません……なら、これもう要りませんか？」

「要る。だが、今は食べん……腹が減ったら食う」

ややふんだ来るようにしてひかるはかすがの手からカロリーメイトを奪った。

その様子が何かおかしくて、どちらともなく二人は微笑んだ。

「都合がいいな、俺の飼い主は？」

「お前の飼い主だから都合がいいんだ」

そんな事を云い返され、かすがは詰まってしまった。

ひかるはそんな彼の表情を見てしてやっつたりの顔を浮かべた。

「なら、明日のご飯はピーマンとシイタケを使った炊き込みご飯でも」

「お前、最悪だなっ!!?! 私を殺す気か!?!」

ひかるは余りに慈悲のないメニューのラインナップにかすがに猛烈に突っ込んだ。

翌日。

ひかるは朝食のトーストを頬張りながら、新聞を読んでいるとある見出しがあった。

『糟日部の●●町のコンビに近くで、〇〇組の幹部血だらけで発見……そして、その被害者の女性を保護』

「おい、何かこの近くでヤクザの抗争があったみたいだな？」
「ふうん？ そーなんだ？」

かすがはフライパンに卵を片手でわり、目玉焼きを作っていた。じゅわあという油のはじける音と卵の焼ける匂いが心地よい。

「しかし、この被害者の女……同情の余地がないなあ」

ひかるは顔をしかめてその記述内容を読んでいた。
かすがは何とはなしに興味を覚えたので尋ねてみた。

「あー、私にはよく分からないんだが、この女、発見してくれた男性に服を脱いで迫って『抱いてくれ』と連呼したそうだぞ？ 痴女の

疑いもあるらしい。全裸のまま歩きまわって警察に保護されたみたいだ。

この幹部と何かしら肉体的な関わりでもあったのかどうか知らないが、快楽に依存した人間はもう戻れんなあ。事情聴取も訳の分からない供述を述べているみたいだぞ? 『私はお菓子より美味しいから』だと、意味が分からん」

「……………ああ……………」

「ヤクザの方はヤクザの方で、ボロボロにされて心身をやられてるようだ。

まあ、警察もヤクザには非協力的だからな、犯人捜しもあまりしないだろう。

大方どこかの組の女に手を出して、その組から報復を食らったって言うのが最良の見解だそうだ」

ひかるは感心なさげにそんな見出しをかすがに呟いた。

「多分だけど……………」

「ん?」

「大方、犬でも噛まれたんじゃないか? 狂犬に噛まれると可笑しくなるっていうし」

かすがは何処か思い出したようにそんな事を呟いた。

かすがは昨日あった事は覚えているが、昨日やらかしたことはない。興味は持たなかった。

そもそも善し悪しに関わらず、目的があって動いただけなのだから。あの女性に何かしたわけでもない。というより、その人が感じた事まで責任を持つ義理は彼にはない。

その結果、どう壊れようがどう生きようがソイツの自由で、その人がそう選んだのだから別に気にもならなかった。

「狂犬か……なら、私も噛まれているかもしれないな」

ひかるはその事件にかすがが関わっていることは知らないが、何となく察していた。

だが、関わっていたとしても、これはどういう事になるのだろうか？ チンピラにからまれた女性を助けて、その女性が壊れたとでも？ 馬鹿馬鹿しい。

そこまで面倒は見切れないし、ヤクザの関係者は殺さないまでも徹底的につぶさないと後々追いかけて回されることになる、心も体もボロボロにへし折ってこそ安全と言っても過言ではないだろう。

警察は被害が起こってからではないと動かないシステムなので尚更だ。

そう言う事を色々考えると、かすがのやったと思しき事は正確で反論する気もなかった。

だが、それと同時に思う。それを平然と思える自分はおそらくどこか世間とズレているのだろう。

「唯の犬よりは面白いかもしれないな、お前？」
「そうですか？」

かすがは感心なさげにひかるのニヤけた言葉を聞いているだけだった。

かすがはそんなひかるのために、メニューを考えること目玉焼きを皿に盛り付けることだけに集中するだけだった。

門河かすが……彼の心には今、彼女と彼女の関係者の都合以外何もなかった。

（後書き）

主人公設定…

名前…門河かすが

性別…両性（現時点で身体は女性だが、心身ともに男性だった時期あり）

胸ランク…巨

身長…170センチ（女性状態では）

趣味…模索中（家庭科などはそうかもしれない）

生年月日…昭和54年12月12日（免許証の日付を信じるのなら）

性格…????

変わった技能を持ち、一般人が訳の分からないことをたまに言う。年齢は10代に見えるが結構いつてる。（高校生に通うようなトシではない）

目に映る全てを達観、客観をしている。

顔つきは中性的で整っているが、近づきがたいものがあるかもしれない。他人に対して性的な興味は皆無。

善人では決していないが、悪人や下衆もまた違う。刹那的で厭世的な生き方をしている。（唯、今はそれなりに楽しんでいるようだ）

人を殺した経験ありだが、その心情には罪悪感も正義感もない。己の理屈や理由で手を汚すタイプ。

頭がいいというより飲み込みが速い頭脳を持つ。

頼まれれば助けるが、その変わりにサプライズを求める。つまらなければ、スルーして突っ込まない。放置プレイ。（最近是人間らしくはなっているようだ）

彼がこのような性格に人格形成されたのは、生まれが原因。

女の身体をしている所為かたまにオネエ言葉をちよくちよく混ぜる。

記憶を失っており、性別もあやふや。そしてあらゆる痛みを感じない身体を持つ。

腕っ節はかなり強く、自分自身ロクでもない生き方をしたんだろうと述べている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4284i/>

らき★すた【迷い込んだ黒犬・出張版】

2010年10月10日22時51分発行